展 景

季 刊

No.119

Autumn 2025

季刊　展景 119号

目次

炎暑〈俳句〉……新野祐子　4
秋の道〈短歌〉……布宮慈子　6
ボタンクサギ〈短歌〉……梅津純子　8
置賜〈短歌〉……小野澤繁雄　10
〈那須通信 64〉今日も一日ありがとう……加藤文子　12
〈薫風颯々 38〉雲海……神村ふじを　18
対詠　ごきげんいかが？　PART 95……小野澤／梅津／布宮　20
前号作品短評A……22
前号作品短評B……25
無二の会短信……28
編集後記……32

今号のイメージ／ラッカセイ

炎暑

新野（にいの）祐子

あめんぼう飛べ水無し池は奈落なり
路上にて干されし蚯蚓犬に食われ
蝮見て犬跳び上がる仁王門
痰切れぬやまいだれに焔でありて

ピーマンも日射病なり尻腐り
夕陽より赤いトマトというべきか
青鷺のあらそう声のかつてなく
枝豆刈られ八百の山鳩降り立ちぬ
黄コスモス揺る手すさびの昆虫図鑑も
千手観音千手を上げる喜雨の中

秋の道

布宮慈子（やすこ）

「未来 山形大会」に参加して五首

学芸員・五十嵐さんのお話にうなづくことあり茂吉記念館の

金瓶（かなかめ）は蔵王の裾野であるゆゑに最上川は遠くて見えず

大石田にて茂吉は川と出合ひしか最上川のそばに暮らして

川岸に座る茂吉の正装の写真は御進講のリハーサル中とふ

さまざまに光当てれば見えてくる斎藤茂吉の面白さなほ

初めての健康教室に申し込みノルディックウォーキングをせむとす

金色の秋の道を歩くため二本のポールを用意して待つ

町はいまクマ騒動に揺れをれば体育館でのウォーキングとなる

屋内で体操をして歩きたり眺めよろしき二階のコースを

人間を恐れぬクマが出でくるは北海道の話にあらず

ボタンクサギ

梅津純子

旱魃の空に聳ゆる雲の峰日々新しく高さ増しゆく

熱中症アラートの午後を帰る子ら大きなランドセル背負ひて

西日なほ熱く炎ゆれば電柱の細き影すらたのみ歩めり

炎ゆる日にボタンクサギの狂ひ咲く秋の日差しに愛で来しものを

数知れぬ小花盛り上げ狂ひ咲くボタンクサギは甘き香失くし

久々の雨に潤ひ薄紅のクサギの花に甘き香戻る

玉臭木・くす玉臭木・紅臭木、花と葉からの名づけ両極

遠き日のカルシウム錠剤甦るボタンクサギの葉と木の香

花言葉「輝くような美しさ」そんなら変へてよ臭木といふ名

花言葉「清楚」に加ふ「運命」かされば定めか臭木といふ名

置　賜

小野澤繁雄

のり鉄の今日はつづいて米どころ稲の間に人の影みゆ

デブリそのポータルサイトの案内もポスターに読む駅の構内

三時間のあいだのあとの車両みるもう集まっている撮り鉄ら

子とともにのり鉄はそのお父さん乗せてやりたいわれ若い頃

全体が雪がこいのよう板谷駅つぎが峠となれる山の谷

長旅にすわり疲れてドアに立つそらみんとしてみる峠みち

バスからは地域置賜日がかげり日向になりて稲穂夏雲

代行バスは駅に寄りつつそれぞれに線路を跨ぐ中郡今泉駅辺（へん）

毛糸とキンチョーの看板それのみが集落飾るいつの頃より

ながながと越後に下るそのみちは大道ならぬ木隠れに家

〈那須通信 64〉

今日も一日ありがとう

加藤文子

六月でも雨でひんやりした日があって、我が家の週末のギャラリーでは弱く暖房を入れた。それから二日後のこと、いきなり三十度近くまで上昇した。

慌てて庭の中央に寒冷紗を張った。長袖のTシャツから半袖に、首から手ぬぐい、仕事場の扇風機の覆いを外し、バタバタしている。汗が吹き出し体中ぐっしょり、一日に二度衣類を替える。

盆栽の水やりもピッチが上がる。何はさておき盆栽を水ぎれさせないことを第一とする。ジョウロでは間に合わないので、ホースを握りながら炎天下頭がボォーッとするのをなんとか踏みとどまらせて、乾きを感知しながら水をやる。

水が足りないわけではないのに、暑さに負けてうなだれているものもある。ひと回りしてホウッとするも束の間、最初にあげた棚は乾きはじめている。水の欲しい盆栽どこですかー、ホースを引っ張りながら右往左往しているうちに一日が終わる。

温室の片隅で残照に映し出されたシダやアジサイが金色に染まりはじめた頃、涼しい風が庭に降りてくる。贈りもののように爽やかな空気が漂う。

なんて心地よいのだろう。暑さに翻弄された昼間のことが遠くに思える。もうしばらく庭を見ていたい。ひと仕事できるかもしれない。鋏を手に、ゆっくり庭を歩く。

あるある手入れしたいものたちが……。

花が終わり実を結ぼうとしているウツボグサ、姫月見草、源平小菊など繁殖力の旺盛なものは、種が爆ぜる前に取り除く。徒長した木々の枝も、鋏を入れてバランスを整える。

炎天下では拾えなかった事々が今なら見える。

夏に負けない植物のキリリとした姿も頼もしい。ユリは先端に紡錘形の蕾を抱えて茎を舞い上がらせている。ミソハギも暑さを突き返さんばかりの勢いで伸び出してきた。

今年は長年育ててきたハツユキカズラの調子が良好でうれしい。昨年までは、申し訳なさそうに小さな葉をつけて辛うじて生きているような様子だった。

鉢を変えて植え替えてみたり、直射日光は苦手と思い、温室の中で育てていた。風の流れを考えながら置き場を変えたりもしたのだが、思わしい変化はみられなかった。

思いきって朝から長い時間日の当たるデッキの軒下に移動させた。

ここが気に入ったのだろうか。一ヵ月もしないうちに葉がぐんぐん伸び出してきた。小さな葉、

中くらいのと、蝶のようにヒラヒラ舞う大きな葉の強弱、みどりの葉を基調にして白色、ピンク、うすみどり、アイボリーが混在する色彩も変化に富んで美しい。

こんな潑剌とした景色、想像もしていなかった。作業場の回し台に移してじっくりみる。落ち着いた心で改めて対面できた。

蔓が伸び過ぎて地面に届きそうな茎がある。程良い長さに剪定して、取り除いた茎はさし木をすることにした。昨年さし木をして発根をはじめたチリメンカズラの鉢に忍ばせるように加えてみた。共に同じキョウチクトウ科、相性も良いのでは……。うまく根づけばチリメンカズラとハツユキカズラの共同生活がみられる。楽しみがまたひとつ増えた。

何かはじめてみると、思いつくことがでてくる。思いつきが思いつきにと、バトンを渡すようにつながっていく。

いろいろできたことがうれしくて、夕食もいつもよりもっとおいしくいただけた。

クチナシとランプシェード

〈薫風颯々38〉

雲　海

神村ふじを

今回から趣を変えて俳句にまつわることを少し書いてみたいと思う。

俳句を始めて年数は経つが、この「省略の文芸」と言われる十七文字は実に奥が深い。ある事象を説明しているような句は愚作と言われる。だから、花鳥風月、四季の移ろい、人々の生活、感動や思想などあらゆるものを題材にして、説明を省き、言葉をぎりぎりまで詰めて、十七文字という限られた文字で表現しなければならない。自分の駄句を見直す意味でもこの随想をいい機会ととらえたい。

雲海やふんはり浮かぶ路線バス　石黒正二

雲海は晩夏の季語とされている。これは、雲海が一年中見られる現象であるにもかかわらず、「信仰登山」という夏の季語に由来しているからだと言う。山や飛行機から見下ろした際に、雲が海のように広がる光景を指している。ただし、飛行機から見た雲海は、俳句の季語としては扱われないようだ。

掲句に接したとき、私は鳥海山をすぐに思い浮かべた。鳥海山は山形県と秋田県に跨がる標高二二三六メートルの活火山。山頂は山形県側の飽海郡遊佐町にあり、これは幕藩体制の時代、庄内酒井藩と羽後矢島藩の力関係に拠るものと聞いたことがある。山頂に雪が積もった姿が富士山に似ているため、出羽富士とも呼ばれる信仰の山である。

かつて、太川陽介と蛭子能収の人気番組、テレビ東京系列で放映された「ローカル路線バス乗り継ぎの旅」で、出発地は確かでないが、終点青森の龍飛崎までの途中で、酒田から県境を越えて秋田方面に向かう路線バスがなくて困っていたところ、鳥海山の五合目の登山口鉾立まで酒田からの路線バスとにかほ方面からの路線バスが繋がるという離れ業をやってのけ、感動して見てしまった記憶がある。

鉾立は標高一一五〇メートル、眼下に日本海が大きく広がり、飛島が遠くにぽっかりと浮かんで見える。

雲海の中を進む路線バス。中七の「ふんはり浮かぶ」がまるでジブリのアニメにでも出てきそうで、何とも言えない柔らかな雰囲気を醸し出している。

対詠　ごきげんいかが？　PART 95〈2025〉

O　小野澤繁雄
U　梅津　純子
N　布宮　慈子

この園にスマホ手にしていたベンチボリビアの人いつも笑顔で　8月3日　O

この宵は満月にして天童の花火の音が響きくるなり　8月9日　N

川の名はかさなるあれど思川鹿児島市にもながれるあわれ　8月14日　O

「そば研」が露店出すとふ大曲の花火大会は雄物川（をものがは）沿ひ　8月22日　N

デブリそのポータルサイトの案内もポスターに読む福島駅に　8月27日　O

満洲の開拓団の哀しみを見据ゑる映画「黒川の女たち」　9月3日　N

石垣のあるみち坂を上りきて中松本町に中松地蔵　9月8日　O

連休の「どんがまつり」は散り果てて日常といふ暮らしに戻る　9月16日　N

畑地には旬の残りかそのなかにニラの花群めにつくひとつ　9月24日　O

稲刈りの終へぬ田んぼに雨降らせ雷（らい）鳴らしつつ天の雲あり　10月1日　N

ゆずれざる乗りつぎなれどいろいろにスルーしてきつみることもまた　10月6日　O

バザーして百円もらひ礼を言ふ地域食堂の行事たのしも　10月14日　N

校庭はすみにすわって一クラス相対にして校庭広し　10月19日　O

「ナニジン？」と若者が問ふカタコトにJICA横浜研修所にて　10月22日　U

前号作品短評Ａ〈小野澤〉

新野祐子

●泣き伏すはふるさとの庭土匂う

庭、庭でしかないところ。泣き伏すことになる決定的でもあれば限定的でもある庭。匂いのする土。現実感のする場所だ。匂いのもどってくるところ、でもある。帰郷という言葉もあるが、冒頭の句、読み方は、タイトルに限定されることになる。戦争からもどってきた「少年たち」のふるさと。

タイトルにある「亜鉛の少年たち」を読んだことがある。亜鉛の、はもう少しパラフレーズされていいとはおもったが、一読たえがたいものがある。戦争の不可能性。それがそのあとでくりかえされることでも。戦争は、武器や弾薬の問題でなく人手の問題である。「女性1人あたり8人以上を産むこと」を奨励するプーチン政権（ニュース）。

蚊の尿（しと）の音ほど繊細政治とは
永遠を相手に戦闘若駒ら

政治には想像力が必要だということ。それが（みられ）ないということか。永遠は不明性そのもの、終りがしれない。若駒は春の季語、ここでは肢体をもつ者ら。

作者にはどうにもやりきれないものがあるよう。「亜鉛の少年たち」は、「アフガン帰還兵の証言」（副題）をまとめたもの。亜鉛の棺（ひつぎ）に密封してもどされる少年たち。これを読むと、もう戦争はできないようなところ。著者は1948年ウクライナ生れ。七句目で、やや説明できている。

無傷で帰れど心は粉々つばくらめ

●宿用院の地蔵まつりに誘はれておつかなびつくりバザーを開く

布宮慈子

写真が記事サイトにでていた。ところで、この一連（地蔵まつり）にはまさかに実況する手つきがある。地蔵まつりはこちらにも経験がないが、作者の経験はバザーを開いた経験のこと。ここでは、こども食堂のためのバザーである。

縁日のやうなものかと考へてこども食堂のためのバザーを
歌と踊り、バンド演奏あるといふ　焼きそば、煮込み、ラムネの店も

この歌は地蔵まつりのコンテンツ（目次）で、一連後半は、お勤め、御詠歌、雨予報はづれて、集まりくる人、人、とされ、大黒舞、日舞とフォークソングに高校生のバンド、後者にこれは過激とあり、僧侶三人のバンドが The Zen（ザ・ゼン）で、なんとロック、寺の活気がその僧侶からも口に出され、それらが活写される。

検索すると、この一連も「（ＰＤＦ）地蔵まつり」とされてそのまま表示されている。地蔵まつ

りは地蔵盆としても検索され、地蔵菩薩からなどいろいろしることがある。今は地域行事。ここがさまざまな活動の場にもなっているよう。在所の歌としてみることもできる。

本尊の前なる僧侶三人のバンド The Zen（ザ・ゼン）のロックに驚く

前号作品短評B〈慈子〉

小野澤繁雄

●幼木の頃までをしる桜たちその生長もみておくごとし

題は「桜」である。若い木のころから知っている桜だから、年々その伸びて育っていくさまをも見ているような（自分がいる）。そう読んだ。ほかに桜が出てくる歌は三首ある。

境内のなかでのことに移されてベンチの位置は桜みる位置

アンブレラ日傘のひとはコスプレか桜堤が背景になる

いきもどりすることになる桜堤下道とれば菜花が間

神社の境内だろうか、桜が咲く時期にはちょうど見える場所にベンチを移動しているという。どこにでもありそうなことだが、細かい観察力による一首である。次は「アンブレラ日傘」とひとくくりの造語的な表現になっている。日傘が流行りの昨今、猛暑の夏には男性も持っているらしい。ここではコスプレとあるから、撮影会のようにも読める。三番目、「いきもどり」は行って戻ってくることか。桜堤という土手があり、下の道を選んで歩くと黄色い菜の花が桜とのあいだに咲いている。名詞をぽんぽんと出しているが、情景がよくわかる歌。

●夕日背に歩む吾が影八メートル怖いもの無き足長女　　梅津純子

題の「足長女」は、何のことだろう?と想像を掻き立てるスイッチだ。掲出歌は八番目に置かれ、連作となっている。

誰もゐぬ河原の畑に草引くに煮物の匂ひにはかに迫る
友よりの種芋三種キタアカリ、メークイン、また男爵よろし
じやが芋の三種の花の色違ふ咲くを心に土被せゆく

一首目から四首目まで読んでくると状況がつかめる。畑は河原にある。回りには誰もおらず、一人でじゃが芋の種芋を植えている作者の姿が見えてくる。急に煮物の匂いがしてきたのはなぜか、風もないのに。三種類のじゃが芋の花は少しずつ異なる色に咲くはずだ。それを楽しみにして夢中で作業するうちに、真っ赤な夕日があたりを照らす。ここでいよいよ「足長女」が登場。夕日を背にして歩く自分の影のことだった。影が八メートルもあり、足も長い。急に怖いものなしになり、気が大きくなった作者。面白い発見であり、形容である。

●黒獅子の竜神様はしぶき上げうねうねうねと練り巡りゆく　　大橋千佳子

黒獅子の竜神様とは長井市の春祭りのことか。調べてみると以下の解説。――祭りは午後から夕方までの「昼祭」と、夕方から夜にかけて行われる「夜祭」の2部に分かれています。勇壮な舞いを存分に楽しむなら、祭りで最も多くの黒獅子が集まる「夜祭」に訪れるのがおすすめ！「夜祭」では、快適に黒獅子舞が見られる有料の桟敷(さじき)席も用意されます――

獅子頭は目玉が丸く飛び出ており、眉が目玉の後方に位置しているなど、ふつうの獅子頭とは違っていて、後方には大人数の舞手が入ることから、「百足(むかで)獅子」ともよばれているという。かなり勇壮な祭りのようである。

水面よりやおらぬうっと顔をあげた！　民を見下ろし睨みをきかす
隣町の獅子舞のなんとおそろしき赤いお獅子で育った者に
ケバブサンドキッチンカーをチラと見て獅子は街へとうねって行った

作者は隣町とはいえ、初めて見た黒獅子の祭りに驚いた様子。しかし、今どきのキッチンカーをちらりと見ていった黒獅子の中の人の仕草を見逃さなかったようだ。

無二の会短信

◆日本語の花の名前は、読んで字のごとく名は体を表すものが多い。ドクダミ、ヘクソカズラ、などはあまりに即物的で身も蓋もない。十首詠のボタンクサギ（牡丹臭木）は、牡丹のような大きく美しい花で、臭い木という意味。優しく甘い香りのする美しい花を、飾ろうと切り取ると、濃い緑色の大きな葉や茎からは強い薬のような異臭がする。私は幼い頃戦後の栄養失調で、カルシウムの白い錠剤を飲まされていたが、そのにおいが甦ってきた。臭いというが、ヘクソカズラ（なんと酷い名づけ、対面では口にするのも恥ずかしい）のような誰もが悪臭と認めざるを得ないような類のにおいではない。花は密集した蕾が中央部から外へと咲いてゆき、牡丹色の無数の小花が半球形に盛り上がる様はくす玉にも例えられる。このような咲き方を集散花序といい、満開の花の傍を通ると優しく甘く香る。長井市の野草展に出品した人は「植えるなら屋敷のはずれに」と言った通り、年々根を縦横に伸ばし増える。惜しげもなく抜けばいいので困りはしないが…。　梅津純子

◆このところ、それはコロナ以降とも同じ、カレンダーには多く不要不急の外出がない。のり鉄は予定にならず、その日の天気次第でもある。一日一日は長いのに予定は案外にすぐくるところ。歯医者さん、床屋さんが予定定番。床屋さん、歯医者さんはかず少ないお喋りの機会でもある。後者では、たまに痛い思いをする。さいきん歯が抜けて、いくつか選択肢のなかからブリッジにした。不安もあったが、入れ歯ではない、八年はもつという。このことで噛む力もともとの六割程度という記事を読んだが、いろいろ少しかたいものと試しながらに噛む。おもっていたより違和感はない。もう何にでもいつまでもがないことは承知。たいがいのことがもうさいご、でそこに納めのようなおもいもある。ところで、Ｗｉｎ７でさいごとおもっていたら、今はＷｉｎ11をつかっているし、フライパンもへたったことで買いかえたものだ。　小野澤繁雄

◆残暑でありながら異常に暑い夏が続いている。山形市の最高気温40・８度が長く続いたこともあり、40度超えはさすがにそうあるものでないと思いながらも、近頃は40度を超える地域が頻出している。「こだえあっづい（暑い）なは、はずめで（はじめて）だあ」と言ったら、娘に「去年も一昨年もそう言ってたよ」と言われてしまった。「何年もかけてつくりしビール腹」　神村ふじを

◆私の家から山の方に一・五キロほどのところに農免道路が走っている。冬期は積雪のため閉鎖、他の季節も車はごくわずかしか通らず静かである。何のためにこの道路を造ったのか、農林予算消化のためとしか考えられない。その長井市分約七キロにわたり路肩に除草剤が使われているのを七

月初めに気づいた。今まで人力できれいに草が刈られていたのに。驚いて長井市に電話した。建設課の担当者は、予算が削られ除草剤散布にしたと言う。除草剤は農薬である。毒性のある農薬を山中に撒いてほしくないと私は伝えた。その後、山形県内で最も購読者が多く、行政は必ず目を通すであろう山形新聞に投書した。「水と緑と花のまち長井」にふさわしい方法をとるべきでは、と。一ヵ月たった今も長井市から何の返答もない。歴史に詳しい友人は、「農免道路周辺には四十を超す縄文遺跡があり、貴重な中世城館も多い。除草剤散布は、市が計画している文化財保存活用計画の趣旨に反する」と説く。なお私の住む白鷹町は毎年八月上旬に草刈りを行っている。白鷹町には森林行政に関して意見を述べる人が少なからずおり（団体もある）、町にはかなりのプレッシャーを与えているはずだ。

新野祐子

編集後記

◆それぞれの短歌や俳句、エッセイの作品をみると、あらためて季節の移ろいを感じる。梅津さんの「ボタンクサギ」は見たことがないと、さっそく調べてみる。こんなに可愛らしい小花が集まっているのか、と納得。小野澤さんの「置賜」には、びっくり。「のり鉄」と称して、埼玉のほうから山形県まで来られた様子を詠んだ一連。スイッチバックの時代にあった「板谷」「峠」の懐かしい駅名もある。新野さんの俳句は「炎暑」。ことしの夏は暑かったうえに長いこと雨も降らなかった。生き物すべてにとって過酷な夏だったと思う。加藤さんのエッセイ〈那須通信64〉からは、酷暑のときの盆栽への水やりや手入れに伴う人間の感性が伝わってくる。神村さんの〈薫風颯々(さつさつ)38〉は、これから俳句に関するさまざまなことを書くという、その第一弾。作句する人でなければわからないことも多いので大歓迎だ。

「対詠　ごきげんいかが?」は、今号より河村郁子さんから梅津純子(すみこ)さんに代わりました。

◆猛暑のあとはクマか！　このところ山形県のほぼ中央、内陸部に位置するわが町でもクマの出没が続き、クマ情報が飛び交っている。町の防災行政無線のスピーカーから流れる声は、耳を澄ましていないと聞こえない。たまたま町にLINEの登録をしていたので、数分後にはメールで届く。

それによって、何時ごろ、どこでクマが目撃されたかを知ることになる。一ヵ月ほど前、クマの出たところがあまりに近くて驚いた。クマは川筋まで行ったことが確認され、そのあと行方がわからなくなったが、現実のこととは思えなかった。数年前に、小高い山にある果樹園でラ・フランスがぜんぶ食われたとは聞いていた。しかし、里のほうまで来るとは思っていなかった。

月に一回、交通安全立哨日といって、子どもの通学時間帯に交差点に旗を持ち立っている。歩いている小学生は一人もいない。みな車に乗って学校へ行くようだった。ちらほら通るのは自転車通学の中学生だけ。いま小学校からは保護者宛にメールが来ると聞く。クマが近辺に出たりすると、登下校時に保護者の送り迎えを促したり、臨時休校にするメールがくるのだとか。クマに関しても「ママたちの情報がいちばん早い」という。小学生が保護者の車で登校すると、学校の近くが「クマ渋滞」になるということだ。

（布宮慈子）

muninokai.com

113号より上記サイトのオンライン版発行のみとなっています。

季刊 展景 119号
二〇二五年十月三十日　発行
編集・発行人　布宮慈子
制作　スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形県西村山郡河北町谷地庚79
info@muninokai.com

Copyright © 2025 MUNINOKAI. All rights reserved.